讀賣新聞（青森版）32面　2011.11.12（土）

（第3種郵便物認可）　2011年(平成23年)11月12日(土曜日)　讀賣新聞

時の筆語り　白岩貢

音楽を身近に　■3■

ドイツ歌曲 楽しむ試み

白岩　貢（しらいわ・みつぐ）声楽家、バリトン歌手。青森短大准教授。1965年中泊町生まれ。東京で教職に就いた後、96年にドイツ留学。カールスルーエ音楽大大学院修了。98年に帰国後は、拠点を青森に置きながら全国各地でオペラやコンサートに出演する。

作曲家にも、記念の年がある。「生誕○年」や「没後△年」のタイトルのもと、世界的に作品が演奏され、クローズアップされる機会がグッと増える。

今年はリスト生誕200年とマーラー没後100年にあたり、演奏会でも盛んに取り上げられた。私自身もこの夏、ドイツ・ドレスデンのオペラハウスで歌っている畑山扶美子さんと東京、青森でコンサートを開いた。ピアノは畑山さんの留学仲間で、私も多くのコンサートで共演している小木曽美津子さん。青森で開いた7月31日は、奇しくもリスト125回目の命日であった。

リストは「ピアノの魔術師」と呼ばれ、作曲家としてのみならず、ピアニスト、教育者として多大な功績を残した。現在はごく一般的に行われる「リサイタル」（一人またはごく少数による演奏会）の形式を作り出したのは彼であり、当時は会場で失神する者が出るなど、今でいうアイドル以上の人気を誇った。どんな曲も初見で弾きこなし、「リストを超えるピアニストはいまだに出現していない」と言われるほどの巨星である。

一方のマーラーは、クラシック好き以外の方にはあまりなじみのない作曲家かも知れない。リストの「ラ・カンパネラ」「愛の夢」のようなポピュラーな作品はないが、交響曲と歌曲に素晴らしい作品を残し、指揮者としても偉大であった。

2人の作曲家をテーマにした青森でのコンサートには、畑山さんの夫でドイツ・グラモフォンレコーディングプロデューサー、ウィーン国立音楽大教授のウルリッヒ・フェッテ氏が友情出演。リストやマーラーが生きた時代背景やドイツリート（ドイツ歌曲）の特色について語ってくれた。

青森でも、声楽家のリサイタルは従前も開催されていた。ただ、地方ではどうしても、なじみのある曲が中心の「名曲コンサート」になりがちだ。もちろん、そこからクラシックに興味を持っていただくことも大切なこと。

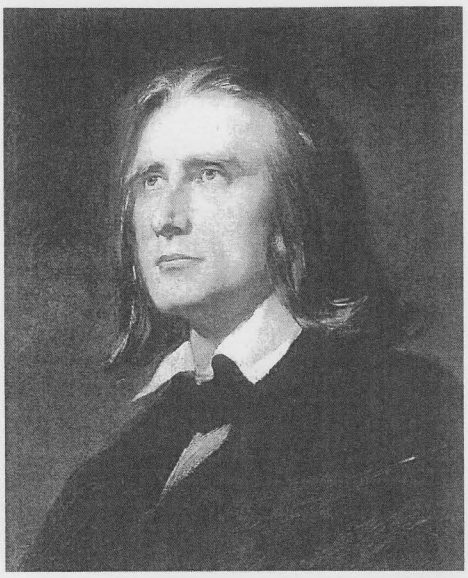
一方で、私がリートのリサイタルを始めると、往年の名歌手のレコードを聴いていた方から「東京や外国に出かけなければ生で聴けないと思っていたシューベルトやシューマンの連作歌曲を、青森で聴くことができてうれしい」といった声がたくさん届いた。このジャンルの演奏を欲している方が青森にもいた。諸先輩が様々な種をまいてくれたお陰だ。

ただし、ドイツ語の素養、リートへの傾倒がなければ、内容を理解するのは確かに難しい。それを克服すべく、①日本語に訳した詩を朗読する②字幕を入れる③演奏前にトークを入れる――などの試みをしている。青森で聴くチャンスがほとんどなかったヴォルフやマーラーの歌曲にも、こうした試みによって「おもしろい！」「詩の内容と音が見事に結びついているのが分かった」という声が寄せられる。

作曲家や詩人をテーマにし、何らかのコンセプトを持つプログラムによるソロリサイタル、という形も受け入れていただいている。世界で活躍する仲間と青森の仲間をつないで様々な交流が持てていることと併せ、私の大きな喜びとなっている。

◇

次回は19日に掲載する予定です。



フランツ・リスト（ハンガリー、1811～1886）「リストマニア」と言われる大勢の女性がいて、いわゆる「追っかけ」と盛んに遊んだようだ（写真は2枚とも「ひとり5分で読める作曲家おもしろ雑学事典」＝ヤマハミュージックメディアより）

グスタフ・マーラー（オーストリア、1860～1911）　少年時代は「シューベルトの再来」と言われ、ウィーン社交界の花形令嬢と結婚したが、死の5年ほど前からはさまざまな困難に直面した

讀賣新聞（青森版）32面　2011.11.19（土）

（第3種郵便物認可）　2011年(平成23年)11月19日(土曜日)　讀賣新

時の筆語り

白岩貢

音楽を身近に ■4■

「ご両親が音楽好きだったのですか」「小さい頃から歌が好きだったんですか」

北津軽郡旧小泊村出身の私が声楽家であることを不思議に思う方が、よく問いかける言葉である。父は村役場で働く公務員、母は自宅で和裁を教えるごく普通の主婦。東京で活躍するピアニストの友人を実家に連れて行くと、日本海を目の前に「ここで生まれ育って、どうしてドイツリート（ドイツ歌曲）の道に進もうと思ったの」と質問された。

特にいい声でも、両親がクラシック好きだったわけでもないが、小さい頃から音楽は好きだった。小1の頃から、テレビで流れる歌や好きな音楽を教室のオルガンで自己流に弾いていた。この時期にピアノを始めていれば、ひょっとして有名なピアニストになっていたのかも、とは身勝手な空想。

ピアノは小4で習い始めた。5～6年の時には、当時流行していたオリビア・ニュートン・ジョン、ベイ・シティ・ローラーズやアバのレコードを何回も聴き、読めもしない英語を耳から憶えて適当に歌った。今思うと、歌との出会いだった。

歌曲 声で伝えるドラマ

音楽の教師になるために音大や教育学部のピアノ専攻といった類に進みたかったが、私の演奏レベルでは到底無理と、高校に入って思い知らされた。恩師のアドバイスで、「声楽だったら何とか追いつくかもしれない」と道を決めた。

声楽でまず取り組むのはイタリアの歌。ドイツリートにひかれたきっかけは、大学2年次の試験でR・シュトラウス「献呈」を歌い、いい成績をもらったことのように思う。リートが自分に合っているとも感じた。

2～3分の曲に広がる大きな世界。人間の様々な心の動きや感情、自然が盛り込まれていて、演技や衣装がなくともドラマを伝えられる喜びを知った。オペラに比べ「地味」と言われる世界（決してそんなことはない！）だが、「もっと奥を知りたい」「表現力を広げたい」「色々な曲と知り合いになりたい」と思った。

卒業後7年間は高校の教師として働いたが、リートを学び直そうとドイツへ留学。レッスン以外にもオペラハウスに通ったり、貧乏なりに工夫して旅行をしたり、現地の食材で日本料理を作って仲間でパーティーをしたり。ビールやワインの安さと美味しさ、ハムやソーセージの種類の豊富さも印象深い。修了試験を終えて帰国する前には、ポーランドへ一人旅。アウシュビッツとビルケナウのユダヤ人強制収容所跡は強烈で、勉強に集中できた幸せを改めてかみしめた。

ところで、舞台ではリートに不可欠なドイツ語のほか、歌の基本のイタリア語、私を歌の世界に導いてくれた英語、フランス語やスペイン語など様々な言語を操らなくてはならない。津軽で生まれ育って津軽弁を話すゆえに、微妙な子音や母音の使い分けが外国語に役立っていると思うのは、気のせいだろうか。

青森に帰ってから、早いもので13年。大学に入る手段として始めた声楽だが、そのお陰でたくさんの方と出会い、様々な歌う場を頂いているのだから、本当に不思議なものである。

＜おわり＞

中泊町の「徐福の里」で大漁旗の特設ステージに立ち、懐かしい日本の歌を歌った（今年6月18日）

白岩　貢（しらいわ・みつぐ）声楽家、バリトン歌手。青森短大准教授。1965年中泊町生まれ。東京で教職に就いた後、96年にドイツ留学。カールスルーエ音楽大大学院修了。98年に帰国後は、拠点を青森に置きながら全国各地でオペラやコンサートに出演する。